

肺動脈狭窄症・心内膜床欠損症

—術後遠隔成績調査報告—

東大・胸部外科 三 枝 正 裕

昭和50年12月31日までに手術を施行し、退院した肺動脈狭窄症 53 例、心内膜床欠損症 25 例に対して「心臓手術予後調査表」を用いて遠隔期における追跡調査を行なった。前者では 43 例から回答があり、返信率は 81% であった。後者の 25 例中 4 例に遠隔死亡があり、これを除外した 21 例について調査を行ない、18 例から回答を得、返信率は 86% であった。

I. 肺動脈狭窄症

(a) 学童期

身体の発育 (解答 11 例)

(i) よくなった	7 例	64%
(ii) 変わらない	4 例	36%
(iii) 悪くなった	例	%

精神的・性格的 (解答 11 例)

(i) 明かなくなった	5 例	46%
(ii) 活発になった	3 例	27%
(iii) 変わらない	3 例	27%
(iv) 悪くなった	例	%

通学状況 (解答 19 例)

(i) 行っている	19 例	100%
(ii) 行っていない	例	%

学校の体育 (解答 19 例)

(i) 普通にしている	16 例	85%
(ii) 激しい運動は休み	1 例	5%
(iii) 行かない	2 例	10%

(ii)(iii) の理由 (解答 3 例)

「苦しくなるから」 例 %

「先生に止められている」 3 例 100%

(b) 職業につく年令

就職 (解答 24 例)

(i) している	16 例	67%
(ii) していない	8 例	33%

内容 (解答 21 例)

(i) ほとんど座っている	例	%
---------------	---	---

(ii) 座ったり歩いたり 1 例 5%

(iii) 歩いたり動いたり 12 例 57%

(iv) 激しい労働 8 例 38%

(c) 現在の身体の調子 (解答 42 例)

(i) NYHA I 40 例 95%

(ii) NYHA II 2 例 2%

(d) 現在の症状 (解答 42 例)

(i) 症状なし 40 例 95%

(ii) 症状あり 2 例 2%

呼吸困難、息切れ 1 例 8%

動悸 2 例 17%

むくみ 1 例 8%

不整脈 2 例 17%

疲れやすい 6 例 50%

風邪 例 %

喘鳴 例 %

チアノーゼ 例 %

けいれん 例 %

(e) 手術の効果 (解答 42 例)

(i) よくなった 42 例 100%

(ii) 多少よくなった 例 %

(iii) 変わらない 例 %

(f) 退院後の病気

肝炎 6 例 60%

塞栓 1 例 10%

心内膜炎 例 %

リウマチ熱 例 %

肺炎 例 %

その他 3 例 30%

{ 肝硬変 1 }

{ 胆嚢炎 1 }

{ 肋膜炎 1 }

(g) 妊娠、出産

妊娠 回

自然分娩 7 回

人工中絶 回

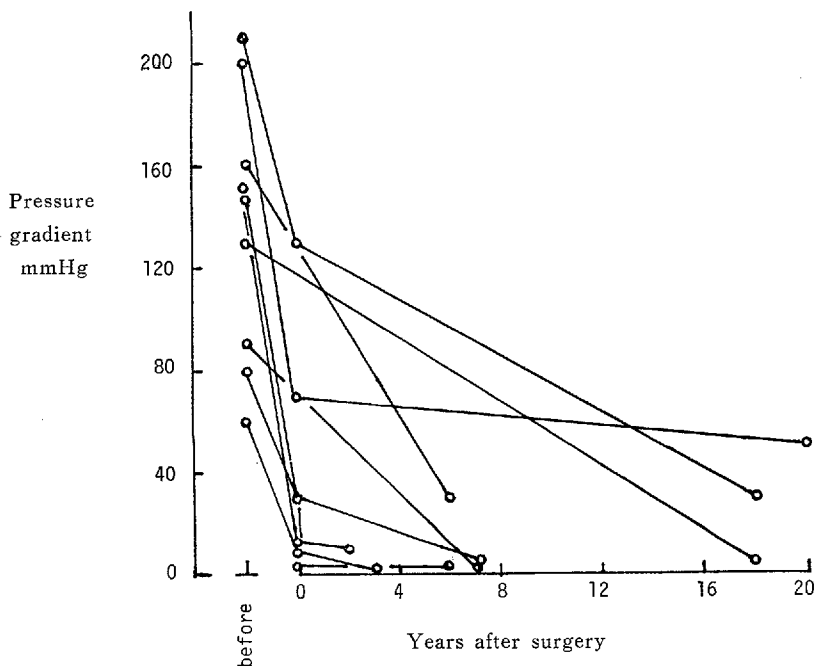


図 1

(h) 現在の薬 (解答 30 例)

- (i) 受けている 7 例 24%
- (ii) 受けていない 23 例 76%

本症の遠隔期にカテーテル検査を施行したものが10例あり、その結果を図1に示す。右心室、肺動脈間の収縮期圧較差は3例において20 mmHg 以上を示した。これら3例中2例は初期の症例で円錐狭窄に対しては無処置で放置したものである。1例は手術時年齢26才の重篤な症例で、術前の長期間にわたる著しい肝腫大のためか、手術後20年を経過した現在は肝硬変症が主病変となっている。本症が早期手術を必要とする一つの重大な理由を示しているものといえよう。

II. 心内膜床欠損症

(a) 学童期

身体の発育 (解答 5 例)

- (i) よくなった 4 例 80%
- (ii) 変わらない 1 例 20%
- (iii) 悪くなった 例 %

精神的、性格的 (解答 5 例)

- (i) 明かなくなった 4 例 80%
- (ii) 活発になった 例 %
- (iii) 変わらない 1 例 20%

(iii) 悪くなった 例 %

通学状況 (解答 8 例)

- (i) 行っている 8 例 100%
- (ii) 行っていない 例 %

学校の体育 (解答 8 例)

- (i) 普通にしている 7 例 88%
- (ii) 激しい運動は休み 例 %
- (iii) 行かない 1 例 12%

(iv)(v)の理由 (解答 1 例)

- 「苦しくなるから」 1 例 100%
- 「先生に止められている」 例 %

(b) 職業につく年齢

就職 (解答 10 例)

- (i) している 5 例 50%
- (ii) していない 5 例 50%

内容 (解答 10 例)

- (i) ほとんど座っている 例 %
- (ii) 座ったり歩いたり 3 例 30%
- (iii) 歩いたり動いたり 6 例 60%
- (iv) 激しい労働 1 例 10%

(c) 現在の身体の調子 (解答 18 例)

- (i) NYHA I 12 例 67%
- (ii) NYHA II 6 例 33%

(d) 現在の症状 (解答 17 例)		
(i) 症状なし	11 例	65%
(ii) 症状あり	6 例	35%
呼吸困難, 息切れ	1 例	8%
動悸	4 例	31%
むくみ	2 例	15%
不整脈	3 例	23%
疲れやすい	3 例	23%
風邪	例	%
喘鳴	例	%
チアノーゼ	例	%
けいれん	例	%
(c) 手術の効果 (解答 16 例)		
(i) よくなった	8 例	50%
(ii) 多少よくなった	6 例	38%
(iii) 変らない	2 例	12%
(f) 退院後の病気 (解答 6 例)		
肝炎	4 例	67%
塞栓	例	%
心内膜炎	例	%
リウマチ熱	例	%
肺炎	例	%
その他	2 例	33%
慢性腎炎	1	%
(g) 妊娠, 出産		

妊娠	1 回
自然分娩	1 回
人工中絶	回

(h) 現在の薬 (解答 12 例)		
(i) 受けている	7 例	58%
(ii) 受けていない	5 例	42%

遠隔死亡が判明し、調査から除外した 4 例の死亡時期、死因を表に示す。

手術時 年齢・性	手術から死亡 までの期間	死 因
1) 20才・男	6 カ月	僧帽弁閉鎖不全による心不全
2) 10才・女	6 カ月	完全房室ブロック
3) 23才・男	1 年	急死
4) 12才・女	2 年	僧帽弁閉鎖不全による心不全

症例 1), 4) は僧帽弁前尖裂隙の残存が原因と思われる。症例 2) は初期の症例で完全房室ブロックとなりペースメーカーを装置したが、電極が感染を来たしたため除去したものであり、症例 3) は、いわゆるリズム死と思われるものである。

これらの遠隔死亡は本症治療の困難性を物語っているものであり、本症治療の要点は、僧帽弁裂隙に対する完全な処理と調律異常、特に完全房室ブロックの防止である。さらに本症手術後には上室性不整脈を来たすことが多いので、その原因の究明と対策も重要な点である。

肺動脈狭窄症及び心内膜床欠損症手術後調査報告

国立循環器病センター 曲直部 寿 夫
 国立循環器病センター 藤 田 毅
 大阪府立病院心臓センター 中 田 健 三 田 紀 行
 小林 芳 夫 岸 本 英 文
 松 本 英 世

国立循環器病センターは昭和52年8月1日診療を開始したばかりで、先天性心疾患の術後遠隔成績を調査する段階ではない。したがって今回は、かねてより協同研究施設であった大阪府立病院心臓センターの症例について長期遠隔成績を追跡した。

I. 肺動脈狭窄の手術予後

昭和52年11月末までの開心術510例中先天性心疾患は455例で、うち心室中隔正常で肺動脈狭窄は44例(9.7%)であった。表1はその内訳で、カッコ内は今回の調

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

昭和 50 年 12 月 31 日までに手術を施行し、退院した肺動脈狭窄症 53 例、心内
膜床欠損症 25 例に対して「心臓手術予後調査表」を用いて遠隔期における追跡
調査を行なった。前者では 43 例から回答があり、返信率は 81%であった。後者
の 25 例中 4 例に遠隔死亡があり、これを除外した 21 例について調査を行な
い、18 例から回答を得、返信率は 86%であった。